ISSN 0289－8624

写真　平成13年度石川県教育工学研究会総会
教育討論会より

題字　山崎　豊氏

石川県教育工学研究会　　2001.7.10　　第61号

学校はどう変わるのか？

理事・金沢市立米泉小学校　明　星　哲　久

今、学校は様々な一見矛盾しているかのように見える二つの理念の中に存在していると言えます。現実体験（生々しい実体験）の重要性と寸時に手に入る世界情報とバーチャルの世界、基礎基本の充実と新しい資質の必要性、開かれた学校づくりと児童生徒の安全確保のための手だて、情報開示と個人情報の守秘…。わたしたちは、これらを対立した矛盾する理念として捉えるのではなく、両立すべき、時代から要請された理念として捉えるべきだと考えます。そこで始めて新しい時代の教育の方向性が見えてくると思います。

今、学校は平成14年度からの新教育課程の本格実施に向けて取り組みを急いでいます。スクールカリキュラムの編成・学校週５日制に向けての学校のスリム化・新教育課程に合わせた評価方法の開発…。ある意味では、まさに混沌とした複雑で煩雑な作業の連続です。しかし基本姿勢は単純で明確であるべきです。それは「今より素敵な姿に」集約されます。今より素敵な子どもたちを、今より素敵な教師が、今より素敵な学習環境の中で、今より素敵な学習を通して育てることです。

さて、この二つは実は表裏一体の関係にあり、同時に検討されるべきことがらだと思います。そして、そこにこそ「教育工学」の蓄えてきた財産が生かされるだろうと期待しています。カード法・ＫＪ法・マトリックス・イメージマップ…手法としても多くの方略を開発してきています。また、「効率的に効果的に確実に」という発想は「最低基準としての学習指導要領」に対する大きな武器になるはずです。「教育工学」の視点から見直すことで、課題の多くが整理され、端的なイメージとして浮かび上がるはずです。

今、学校は大きく変わろうとしています。その変革の担い手の一人であることに喜びを持って取り組みませんか。そして、「教育工学」研究に携わってきたことで、若干の自信を持ちながら。

【全体会報告】

21世紀の教育討論会「キーワードで 集まる 語る 斬る」

（抜 粋）

石川県立小松養護学校　畠 山 久 雄

司会進行は村井万寿夫事務局長、パネラーは、金沢学院大学吉田貞介先生、金沢大学黒上晴夫先生、金沢経済大学岡部昌樹先生、金沢大学中川一史先生、加藤隆弘先生の５人です。

開始時間の前に席が埋まって、予備の椅子を用意しても足りなくなるような熱気の中、まず、村井事務局長から、

「今日の研究発表会でもメディアに関する発表が多かったようですが、コンピュータやインターネットを使ったら、体験がちょっとと言うことをよく聞きます。最初は、実体験、ヴァーチャル、VRMLというキーワードから取り上げていきたいと思います。」というなげかけがあり、これに対して福井の竹内先生は、

「今までは体験重視でやってきたけれども、１台のコンピュータが入ったことで学校が変わっていく。そうすると先生方も、コンピュータの便利さは認めるけれども、人との関わりをどのようにしていけばいいのかということをよく考える必要があるのではないか。」

清湖小の福岡先生からは、

「本校では情報加配の先生を中心にして、情報通信リテラシーを決めてやっている。ヴァーチャルの世界はそれに浸りきってしまうのではないかという心配があるが、私が授業をした限りでは、逆に現実の実体験などを思い出していることもあったので、あまり心配はしていない。」

情報加配の立場から、清湖小の細川先生は、

「総合の時間から15時間を学担と一緒にやっている。しかし、コンピュータやインターネットの授業で、いわゆる操作の面だけを教えるのではなく、子供達や学担の思いに合わせた情報教育を計画していかないと子供達や学担の意欲が湧いてこないようだ。」という発言があった。

次に、操作面だけではなく、思いややる気を大切にしないといけないということについては、東谷口小の方村先生が、

「コンピュータやその周辺環境はどんどん変わっていくと思うが、子供が何を求めているのか、何に興味を感じているのかをもっとよく考える必要があるのではないか。また、自分の子を見ていると、使いたくてたまらないがコンピュータに対する教師の構えがいろいろあるので、させてもらえない。その辺も考える必要がある」という発言もあった。

金沢の情報教育について扇台小の清水先生から、

「自分は、子供達には基本的な操作しか教えない。子供達はマニュアルを見ながらやりたいことをやっている。子供達の意欲に任せている。」という発言があった。

インターネットでのウェブ閲覧と発信について、パネリストの加藤先生から、

「情報機器やインターネット、ウェブサイトを使う時はねらいが必要になる。そのためにはねらいにそった準備も必要になる。そして、教師の方で、いろいろな手段を活用して力がつくように工夫しなければならない。」
と言う指摘があった。そこで、メディアの特性を考えた発信について、松任の中條先生から
「交流する相手に自分の思いを伝える時に、メッセージにどういう工夫が必要か。どういうメディアを使えば一番わかりやすいかということを、子供なりにわかるように仕組んでみた。次第に子供達は、自分なりにメディア特性を意識するようになってきた。」という実践の紹介があった。その中で、やる気や必要感については、
「楽しくなるように仕組んでいる。楽しくなる仕組みを教師が考えるだけではなくて、もととなっているテーマが同じであるとか、テーマ性とかが大事になってくると思います。」

交流については、金沢大学の中川先生から、交流する時に1つはテーマがあり、1つは相手が誰かなという感覚があります。この二つがどのように絡んでいくのかということがとても大事であって、一方では仲良くなる。一方ではテーマのことを深めていくことが必要である。」

交流について、台湾の学校と交流を行った清水先生から
「世界の3つの学校が集まって1つのウェブページを作るということをやった。テーマについては、難しいテーマだと自分たちが直接体験できることが少ないので、なかなか交流までは行かない。これが身近な文化の比較というテーマになったときに、交流が深まった。例えば、お風呂の入り方やお互いの食べ物など。この経験から、子供達が知りたいと思うことで、なおかつ直接体験でき、相手にも共有できるようなテーマだと外国とも交流がうまくいくようだ。言葉については、写真やビデオでカバーした。」

福井の竹内先生から、遠隔よりもクラスの中でのコミュニケーションについて
「生きる力の根本は、自分の生きている足下だと捉えているので、クラスの中で蓄えてから発信していこうと思っている。自分たちもパソコンを使ってメールのやりとりもするが、それは必ず使うのではなくて、その時必要だから使うようにしている。」

コンピュータ利用について親の立場から、
「コンピュータもいいけれど、小さい間は、実体験をしてほしい。実際に味わう感動というものがコンピュータではないのではないか。」という発言があった。

学校でのコンピュータ利用に関して、金沢大学の黒上先生から
「ヴァーチャルとか実体験とかを考える時には、一般的にはコンピュータをイメージするが、以前から学校で使われている本というメディア。これはヴァーチャルじゃないのか？例えば、餅つきの本を読んで餅つきの様子をイメージして実際にはやらないと言うことはよくあった。それはそれで推奨されていたのに、それがコンピュータになるとどうして敵視されるのだろうか？なんかおかしいですよね。」というなげかけがあり、これに応える形で、西田先生から、
「私たちが心配していることは、本の場合は、本の世界と言うことを意識しているけれど、コンピュータを使った時に、その世界があまりにも現実味を帯びているために、教える側も体験する側もそれでよし、体験したんだ。と勘違いすることなんです。」

金沢経済大学の岡部先生は、コンピュータ利用教育の変遷を通して
「コンピュータの歴史は、1980年代は、言語を使ったプログラミングを。85年頃は効率化でCAIが盛んになり、一定の成果をあげた。90年代になると、ツールを使って人間の五感を拡大するという考え方が入ってきた。95年頃に、インターネットが行われるようになり、従来でき

なかったコミュニケーションがネットワークを通じてできるようになった。今は、情報技術の発達がどこに向かっているのかわからないので不安なのだと思う。教科書だってヴァーチャルなのに、コンピュータが入ってくるとヴァーチャルが問題になる。論理のすり替えが起こるんですね。この端的な例が宮崎の事件ですね。先ほどの先生は、コンピュータは楽しければいいんだと。何かを教えるためにあるんじゃないんだ。いう意見でしたが、私は、楽しさを追求してコンピュータを使うのはものすごく怖いことだと思います。コンピュータを使うためには、学力論を提案した上で使うということが私の考えです。」

附属小の三田村先生は、

「薬缶を打ってコロコロと転がっていくCMで、年輩の先生はうまいこと糸で吊ってあるのねといったが、それだけ仮想の世界がコンピュータでうまく表現されている。このように現実とヴァーチャルが区別つかなくなっている中で、子供達にどういう対応をすべきなのか考えていく必要があるのではないか。」

岡部先生の発言に対して加藤先生は、

「楽しさについて哲学が必要なのは私たちの世代までかもしれない。今の子供達は、これがあるならこんなことができるんじゃないか。コンピュータはもともと楽しさで使われるものなので、この中で楽しい部分をどう他に生かしていくか。私たちにできることは、使う上で最低限押さえて欲しい、考えて欲しい場面を作って経験させていくことが大切なのではないか。」という発言があった。

コンピュータ利用に関して翠星高校の守田先生や方村先生は、

「本校では、パソコン室でインターネットはできない。でも生徒からはインターネットへの要望が多い。どうしてかというと、アダルトサイトを見たいという。自分はかまわないと思うが、県教育センターのネットワークに繋いでいると、アダルトサイトは見ることができない。このことは、学校におけるリテラシーやインターネットの使用法を教えるという面で教師の力量が問われない。ところが、生徒は実社会や家ではアダルトサイトを見ている。もう明日からでも何とかしなければならない問題になっているのに、バイクの3無運動と同じ発想なわけです。私は、ソフト面やハード面で規制をかけるのではなく、教育という場面で情報をきちっと選別できる能力を付けさせることが大切なんだと思っています。」

「今のお話について、学校に来てくださっている情報教育のボランティアの方とのお話しすると、社会が要求していることと教育の現場でやっていることとは違いがあるのかなと言う思いはある。コンピュータに頼ることをよく思わない方や敵視する方もいますが、子供達にいろいろな選択肢を与えることは大切なのではないか。」

この他、養護学校の山上先生は、

「うちの学校は、興味関心を持てるようなソフトを用意することに配慮した」ということ。

盲学校の尾小山先生からは、

「基礎になることはメディアに限らず大切で、私としては、今の学習スキルとか実践スキルに興味があるまた、視覚でも感覚受容器を通さないで、直接脳に入力するようなシステムができている。」という発言があった。

金沢学院大の吉田先生からは、

「二つの見方考え方があって、1つは実体験を尊重して自分の意識や意見を固めていくということ。他方は、遠隔の人とコミュニケーションをして体験を広めていこうという考え方です。実体験派は、五感を大事にして学習を進めていこうという考え方ですが、これが、インターネットを使って体験していこうと考えている立場の人とのスタートラインでの五感のとらえ方の違いなわけです。芸術系では、従来のコンピュータにないところの触覚であり味覚であり、嗅覚を拡張するようにしている。工学屋さんのコンピュータと芸術屋さんのコンピュータの違いのようなものですね。学院大の学生には、従来の工学屋さんの持たない部分をトレーニングする。それを増幅するためにメディアがあると言うとらえ方をしています。」

この他、福井大学の学生の方からは、

「コンピュータを能動的に捉えるか受動的に捉えるかで使い方が違ってくるのではないか。」

という発言が、加藤先生からは、

「コンピュータの果たす役割と活用していく方法を考える必要があるのではないか。2項対立のように捉えるのはよくない。」

岡部先生からは、

「実体験を喪失させたものはコンピュータではなく、工業社会の大量生産社会がそうさせたのである。だからこそ、コンピュータをどう使うかという意義付けを教師がすべきなのではないか。ヴァーチャルリアリティについても仮想世界とのつきあい方を教えるべきではないか。」

という発言の後、福井大学の村野井先生が、

「テレビで見ていても本物と現実との区別がつきにくい。我々がヴァーチャルと思っているのか、どの辺がヴァーチャルなのか、ヴァーチャルとは何か、いつまで続くのかよく把握していないうちに世の中が進んでいるように思う。この辺はこれから研究したい。」

吉田先生からは、

「メディアリテラシーにどう取り組んでいくかということに、メディアの変化が激しいのでとまどっている方が多いのではないか。でも、研究を続けて欲しい。」という発言があった。

細川先生からは、

「インターネットでテクニックだけを教えたり、たくさんの情報があるね、だけで終わったりするから問題があるではないか。学習の値打ちと言うことを考えれば、ヴァーチャルは意識しなくてもいいのではないか。」という発言があった。

以上のように、活発に意見を交換しあった討論会であった。

最後に本会会長の吉田先生から、

「実践的な研究が全国的に流行っているのですが、同時に開発的な研究も是非行っていただきたい。5年先10年先のことはわからないが、2年ぐらい先のことならある程度予測がつく。2年先にどんな教育をやるのかどんな学習方法が効果的なのかと言うことを予測して、研究を進めていただきたい。そういう意味で、現在日本中でやっている研究より2年先の研究に取り組んでいただきたい。」

という実践研究に加えて、開発的研究もという吉田先生からのメッセージの後、村井事務局長が、

「私たち教育に携わるものが、小・中・高と、学習者側にたってメディアとかコンピュータをどうしていくか。情報を見る目、メディアを見る目をどう育てていくか、が問われているように思います。」と締めくくって、2時間を超えた教育討論会が無事終了した。

パネラーの先生方、出席者の先生方、フロアー、パネラーの双方からうまく発言を引き出して下さった司会の村井事務局長お疲れさまでした。

高等学校理数科「課題研究」における「情報活用の実践力」の育成

石川県立小松高等学校　中本忠彦

Ⅰ．目　的

前任校（石川県立小松高等学校）で取り組んでいる「課題研究」の活動を通して、情報機器を活用する経験を積ませ、評価し改善することで、「情報活用の実践力」の育成を図った。

Ⅱ．内　容

1．情報の収集・検索、結果の集計・処理

研究を進めていく上で必要となった資料は、図書館の他、電話やファックスを活用して情報収集に取り組んだ。また、インターネットによる検索では、検索エンジンの操作法やキーワード検索での情報の絞り込み方など、指導が必要であった。また、扱うデータ数が多い場合には、表計算ソフトを利用して処理するよう指導した。

2．結果の表現・発信

(1)　報告書の作成

前年度生徒が作成した課題研究の報告書をもとに、論文形式でまとめていく方法や注意点を説明し、報告書の作成に取り組ませた。ワードプロセッサをつかって報告書を完成させたが、数式や化学記号、図やグラフの入力については、指導が必要であった。

(2)　表現の工夫

テレビのニュース番組や、情報番組のなかで、「伝えたいことをどのように工夫して視聴者に伝えているか」という視点で番組を視聴させ、「聞き手」に伝えたいことをわかりやすく伝える工夫などを指導した。

生徒は、報告書のなかで調べた有害ガスの量を、「聞き手」のよく知っているものの大きさと比較して表わすなど「聞き手」を意識したの工夫が見られた。

(3)　「聞き手」を前にした発信

発表のリハーサルでは、改善すべき点がいくつか見つかっても、指摘は1つに留め、次のリハーサルで改善されたら、別の点を直させるという指導をくり返した。発表会後、「聞き手」の評価用紙や、ビデオをつかって、改善させた。

(4)　機器を介した発信

小学校の子どもたちに、電子メールをつかって二酸化窒素の測定を依頼した。調査方法などの説明は、テレビ電話で行った。生徒は、ことばだけでなく、図や実物を用意して説明した。しかし、高校生の声が小さく、単語での受け答えが目立った。そこで、昼休みの時間などを使い、テレビ電話を用いた交流を増やすことにより、声も大きくなり、自信を持って意見を述べることができるようになった。

分析した結果はビデオレターで小学生に報告した。測定場所の様子や分析装置などをビデオ撮影するなどの工夫が見られた。

Ⅲ．成果と課題

コンピュータやテレビ電話などの情報機器は教師が実際に操作しながら説明することにより、適切に活用する能力が高まっていった。

「聞き手」を意識した情報の表現、発信能力の育成には、マスコミでの表現技法や発信の工夫に加えて、前年度の発表が生徒の活動の刺激となった。また、教師もプレゼンテーションを意識して授業などで実践してみせることも効果的であった。

発表会では「聞き手」の評価をフィードバックし、改善することで、情報を表現する技法や発信する能力が高まった。中学生や他の高校生を前に発表する機会もあるので、「聞き手」を意識した表現方法の工夫を指導した。

今後は、情報機器の長所を理解させ、適切に選択できる能力の育成を図りたい。

地域学習におけるメディア活用の在り方

山中町立河南小学校　山崎幸代

1．はじめに

現代社会の情報通信・技術は、日々進歩しており、今日、教育の中でも、児童の学習に有効な情報技術は様々な形で取り入れられている。

また、2002年より新たに開設される「総合的な学習の時間」は、児童の問題解決能力の育成を図るとともに、表現コミュニケーション活動を取り入れ、人とのつながりを深めることを目指していると考えられる。つまり、「生きる力」を育成するための学習といえる。

さらに、この高度情報化社会を生きる児童にとって、情報活用能力の育成は不可欠である。この力の育成は、「総合的な学習の時間」において育成する「生きる力」につながっている。

このような状況をふまえ、地域学習を通して、メディア活用の在り方を探っていく。

2．研究の目的と概要

1．身近な地域への情報収集活動を効果的に進めるためのメディアの活用方法を探る。

地域の中での情報収集において、様々なメディアを活用した。そこでのメディアの利点を探っていく。

2．地域同士を結び付け、コミュニケーションを深めるためのメディア活用の在り方を追究する。

地域へ発信することを目標に取り組んだ児童の活動と変容、そして、さらなる発展的な学習への取り組みについて追究する。

3．研究内容

単元計画として山中町（地域）を取り上げた。単元「みんなに伝えよう　私たちの河南」を設定し、自分の住んでいる地域を実際に自分の足で歩き、情報収集し、良さを発見していく活動を行った。児童は、この活動の中で、デジタルカメラやビデオカメラ、カセットデッキ、電子メール、TV電話等のメディアを活用し、調べ、まとめ、伝えるという活動を進めていった。

情報収集の際のメディア活用は、たくさんの情報が得られ、手軽に利用できる点で非常に有効であった。集めた情報は、ビデオにまとめ、隣接校の児童へのビデオレターとして送り、さらにケーブルテレビを介して地域へと発信した。

4．今後の課題と方向性

活動を終えて、児童の情報収集手段の拡大、表現方法の変化、地域への思いの深まり、学習の場の広がり、この4点が成果としてあげられた。しかし、たくさんの情報を集めたことで、その情報を取捨選択する力の不足が浮き彫りになった。

今後は、児童が目的意識をもち取り組めるよう学習を進めていくことで、情報の取捨選択能力を養い、さらに、共同学習を視野に入れた取り組みを考えながら、今あるメディアのそしてこれからのコミュニケーション活動の道具としてのメディアの環境作りや有効な活用方法についてさらに研究を深めていきたい。

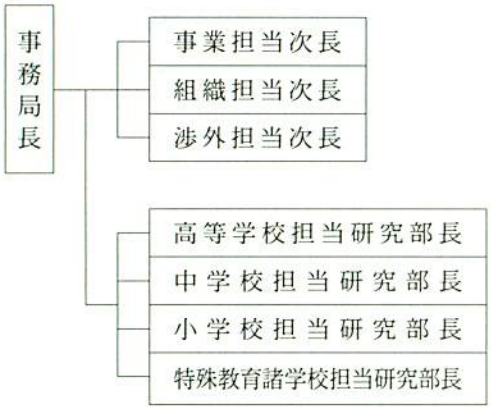
石川県教育工学研究会の21世紀の新たな飛躍をめざして

～新事務局体制の紹介～

新事務局長　村井万寿夫

1．これまでの事務局体制

平成12年度までは、事務局長、事務局次長、各校種担当研究部長という事務局体制で当研究会の事務局任務を遂行してきました（下図参照）。



この体制は平成７年度から採用し、事務局の主な業務である以下４つの業務を各校種担当部長を中心に研究委員の献身的な協力を得ながら推し進めてきました。

① 研究会ニュースの発行（年５回）
② 研修活動の企画・実施（年４回）
③ 会報の発行（年２回）
④ 研究大会の企画・開催（年１回）

これらの業務をローテーションを組みながら行うことで当研究会の年間事業がスムーズに行われると同時に、一人一人の研究委員が各々の役割を自覚できる体制であったといえます。

反面、上記①～④までの業務に専念するあまり、本来の研究にあてる時間や心理的な余裕がなく、各校種で十分に教育工学研究することができないといった面も少しずつ表面化してきました。

2．これからの事務局体制

そこで、本来の教育工学研究を推し進めることを主眼におき、６年間続いた事務局体制を次ページのように刷新することになりました。

研究部長の中條先生を中心とした新しい研究部は金沢大学の加藤隆弘先生のアドバイスなどをもとに、５つの企画を打ち出し、すでに具体的な実践研究に取り組まれています。

取り組みの成果を来る10月26日～27日に開催される第27回全日本教育工学研究協議会全国大会富山大会で発表しようと、現在、論文を作成中です。その論文作成では若手の研究委員、そして、研究委員の職場の同僚も交え、岡部副会長を師と仰いで「論文検討会」も開くなど、積極果敢な取り組みを展開しています。

また、４人の次長はそれぞれに以下の担当業務を着実に遂行しています。

◇ 組織担当…会計・会費・会員名簿作成
◇ 企画担当…研修会・大会・総会の企画
◇ 会報担当…会報発行計画（執筆依頼）
◇ Web 担当…ＨＰ開設・ニュースの発行

3．事務局長として

新事務局体制案については、５月27日の総会にて承認（３月４日の理事会で審議）されたばかりで、日が浅いのですが、とても順調な船出ができたと思っています。

事務局の皆さんが素晴らしい方ばかりなので、事務局長として采配を振るうことはないくらいです。懸案だった当研究会の Web ページも開設され、事務局への連絡事項等も電子メールでやりとりできることが可能になる今年は、研究部の活動も併せて、大きな飛躍の年になるだろうと思われます。

どうぞ、会員の皆様、新しい事務局をよろしくお願い致します。

【平成13年度 石川県教育工学研究会 新事務局体制】

事務局長	村井（県教セ）	
事務局次長	組織担当次長	嶋　（西南部中）
	企画担当次長	畠山（小松養護）
	会報担当次長	浜坂（小将町中）
	Web担当次長	清水（扇台小）
研究部	研究部長	中條（東明小）
	副部長	向出（矢田野小）　飯田（条南小）
	小学校担当	正來（野々市小）　坂上（押野小） 奥野（明成小）　山下（大根布小）
	中学校担当	大桑（高岡中）　前（鹿島中） 端崎（附属中）
	高校担当	樫田（附属高）　守田（翠星高） 島崎（二水高）
	特殊教育担当	池田（小松養護）
研究推進アドバイザー		加藤（金沢大学）

○新事務局体制は平成13年度～14年度の２年間を想定している。したがって、２年後にこの体制を見直して、平成15年度以降に臨むこととする。

○平成14年度には４次長の業務担当の交代もありうる。たとえば、組織担当次長が企画担当次長に、企画担当次長が会報担当次長になどのように。

○同じように、研究部内の交代もありうる。たとえば、副部長が部長に、小学校担当が副部長になどのように。

○年度末人事異動等により、メンバーの変更もありうる（事務局員としての出入り）。

組織担当事務局次長になって

金沢市立西南部中学校　嶋　　耕二

5月27日（日）に、文教会館で平成13年度石川県教育工学研究会総会が行われました。今回は、過去3年間の事務局体制を見直し、「若手」を起用し、かつ、研究部を強化する体制をスタートさせました。

私は過去3年間、中学校担当研究部長をさせていただき、何もわからないまま、先輩方にいろいろ教えていただきながら、研究発表大会の準備（発表者募集・運営等）、会報の編集と発刊、研究会ニュースの発行等を行ってきました。これらの仕事をさせていただいたおかげで、多くの方々と交流を持つことができ、たくさんの情報を得ることができました。とても勉強になったと思います。

今年度を迎えるにあたり、研究部長も終わり、一息つけるかと思っていたところ、組織担当事務局次長をすることになりました。会員の募集や会費の管理など自分が一番苦手としている分野を担当することになり、不安が多い今日この頃です。組織担当という仕事は、自分なりには「仲間集め」と考えています。

どの組織でも同じだと思いますが、人数が減少し、平均年齢が徐々に高くなってきています。当研究会の会員数も減少気味で、「今後どうなるのか？」という心配もあります。ただ、授業設計・カリキュラムづくりにおいては、教育工学の存在は重要になっています。活躍している先生方にこの会の活動を紹介し、声をかけなければならないと考えています。

さて、大切な会報のページをつかって自分のことを書くのは大変申し訳ありませんが、私が石川県教育工学研究会の仕事をさせていただいている理由の1つ書きます。

今から25～26年前のことです。

私は、金沢市立中村町小学校の児童でした。まだ、木造の校舎で今の学校とは全く違った建物でした。ただ、「視聴覚室」という何だかわからない教室（空き教室でした）があり、ピアノがおいてあり、学年で映画やスライド・ＯＨＰを見た覚えがあります。

その当時、授業にはＯＨＰが盛んに使われ、オープンリールのＶＴＲデッキが入ってきた時期でした。当時の担任の先生はとても若く、放課後ソフトボールを教えてくれたり、体育の授業をはじめ、どの教科も熱心に教えてくれていました。その授業の中で、何度かＶＴＲを用いてＮＨＫの「緑の地球」を使った授業をしてくださいました。当時は、自分なりにＶＴＲを新鮮に受け入れていたように思い出されます。

それから何年後かに教育工学研究会に仲間入りさせていただき、金大城内キャンパスの教育工学センターに通うようになって、その当時の「緑の地球」の実践の意味が分かり驚いたのを覚えています。

私が教員を始めた頃には、コンピュータが学校現場には入ってきた時期でもありますが、授業でメディアを比較的受け入れやすかったのは、小学校当時から情報教育をしていただいた担任の先生はじめ現在の教育工学や視聴覚の研究会のリーダーになっておられる母校の先生方のおかげだと思っています。

この研究会の一員として仲間と研修しながら子どもたちを育て、数年から数十年後にその取り組みが生きるような授業実践ができたら、という理想を抱いています。

最後に繰りかえしますが、会員みなさまのまわりでコンピュータや情報教育に限らず授業に熱心に取り組んでいらっしゃる先生方に本研究会の活動を紹介されて仲間に入っていただけるようにお声をかけてください。

企画・研修・大会担当次長になって

石川県立小松養護学校　畠 山 久 雄

今年度から事務局体制がかわって、今までの特殊教育担当研究部長から企画・研修担当の次長になりました畠山です。よろしくお願いします。

これまで研修会は、7月に1回、8月に2回、12月に1回の計4回行ってきました。その時々に、会員の方やそれ以外の先生方にとって有用な研修会はなにかと考えて行われてきました。例えば、一太郎や花子を使った研修会がありましたし、KITを使った教材作成研修会もありました。賛助会員さんから最新の機材やソフトご提供いただいて、最先端の研修会を行ったこともありました。外国の研究者の方を招いて講演会を行ったこともありました。

最近ではインターネットのウェブ閲覧やホームページ作成、あるいはほとんどの学校に校内LANが組まれていますが、LANケーブルの作成と接続体験、校内LANを使ったアンケートの実習体験などを企画してたくさんの先生方の参加をいただいてきました。

今まで行われてきたセミナーや研修会は大変な好評をいただいています。それで、今後も、これまでの形を引き継いで、研修会やセミナーなどを企画していきたいと考えています。その第1回目として、今年度総会後の研修会は、昨年度総会に引き続いて、講演会ではなくシンポジュームを企画しました。

「総合的学習と英語活動」というタイムリーなテーマで、村井事務局長の司会進行のもと、県内小学校の実践者の方と大学の研究者の方を交えて、有意義な意見交換が出来ました。今回のシンポジュームもフロアーからもたくさんの意見がだされ、予定の時間をはるかにオーバーするほどの盛り上がりを見せました。

昨年度も「情報教育と総合的学習」というテーマで大変な好評をいただいています。

このように会員の皆様や参加者の方が気軽に意見交歓できる形の研修会やセミナーを今後も企画できればと思っています。

（平成13年度総会後のシンポジューム）

これからの予定は、7月の金沢学院大学での研究会や8月の夏期セミナー、12月の冬期セミナーなどが予定されています。事務局長や他の次長の方、会員の皆様に相談しながら、たくさんの方が参加できるセミナーや研修会を企画できればと思っています。会員の皆様のご協力とご支援、参加をよろしくお願いいたします。

事務局次長（会報担当）より

金沢市立小将町中学校　浜 坂 昌 明

今年度からの新事務局体制にともない、今までの組織担当事務局次長から会報担当に担当業務がかわりました。組織担当として3年が経ち、仕事にも慣れてきたのですが、石川県教育工学研究会事務局では同じ仕事は3年までという原則があり、その原則に従っての業務交代なのです。学校での校務分掌等にも同じことが言えると思うのですが、3年同じ仕事をするとその仕事に慣れてきて、ある意味ではプロフェッショナルへの道を歩むともいえます。しかし、ある意味ではマンネリ化してくるとか、他の仕事ができない、後継者が育たない等の問題が生じてきます。それゆえの交代なのです。これから気持ちを新たに、新しい仕事に取り組んでいきます。事務局長や他の事務局次長に迷惑をかけないように頑張っていこうと思っていますので、よろしくお願いします。

1．会報について

会報は年2回7月と3月に発刊しています。石川県教育工学研究会の活動の様子（5月総会や3月発表会、セミナー等）や県内外の各種大会等の様子を会員の皆様にお知らせする大切な広報誌です。会報のおもな内容は次のとおりである。（年度によって若干の変更もあります）

(1)　7月発刊

- 巻頭言…おもに理事の先生にお願いしている
- 3月の大会の講演または全体会について
- 3月の大会の発表要旨（会員の発表のみ）
- 特集（H12は総合的学習セミナーについて、H13は新事務局体制について　など）
- 5月の総会の講演等について
- 寄稿論文　又は随想
- 役員名簿（と会則）
- 会計報告
- 事業計画

(2)　3月発刊

- 巻頭言
- 夏季セミナー、冬季セミナー報告
- 全国大会報告　発表要旨　等
- 県視聴覚大会等について
- 支部活動報告
- メディアコンテスト報告
- 特集
- 寄稿論文　又は随想
- 3月の大会プログラム
- 事業報告

2．会報についてのお願い

いつも同じ人（事務局や大学の先生）が原稿を書いているのでは？という話を耳にすることがあります。会報の性格上（大会や総会の報告等）やむをえない場合も多いと思いますが、これからはできるだけ多くの会員の方に会報の原稿を書いていただきたいと考えています。寄稿論文、随想等よろしくお願いしたいと思います。事務局までお知らせください。また、事務局から原稿依頼する場合もありますが、よろしくお願いします。

3．今回の会報から

今回の会報から、印刷経費の削減、校正段階の省略等をねらいとして、原則写真製版に変えてみました。ご意見等ございましたら、担当までお知らせ下さい。

事務局次長ＷＥＢ担当になっての抱負と最近興味あること

金沢市立扇台小学校　清 水 和 久

１．ＷＥＢ担当になって

今年度から２年間、教育工学研究会のホームページおよび、ニュースの発行の仕事をします。いままで石川県教育工学研究会の公式のホームページがなかったのが不思議ですが、個人のページではよく教育工学の情報を発信していました。研究事業の案内や、セミナーなどの案内および、その結果をお知らせしていきます。また、研究事業部の実践の動きがわかるように、ホームページにリンクを貼り、タイムリーな実践報告ができるようにしたいと思っています。

URL→http://web2.incl.ne.jp/kogaku/です。みなさんよろしくお願いします

２．英語活動への期待

今年は、学校でＴＴとして、５、６年の理科や総合的学習に関わっています。総合的学習は特に情報教育と英語活動です。中でも英語活動は今年度から、週１時間に増えたので、コンピュータなどを利用して楽しい活動にしたいと思っています。

(1)　台湾との映像の交流

台湾では小学校２年生から英語の授業が始まります。各学校には英語の先生がいて授業を持っています。私はヴァーチャルクラスコンテストで台湾の志開小学校の先生と知り合い、ここ数年共同でWebを作ってきました。現在扇台小学校のパソコンクラブと台湾の志開小学校で交流があります。英語活動では毎週新しい表現を紹介していきますが、その表現を実際に使ったり、使っている場面を見ることで理解が深まります。そこで、英語活動に使う表現を台湾の学校でも使ってもらい、実際にその英語表現を使ったビデオをmpgファイル形式にして送ってもらうのです。例えば、"Where are you going?" "I am going to ○○" というような文で、○○の所に台湾の観光地などをいれて紹介してもらえば、台湾のことがよくわかります。これはもらうだけではなく、こちらからも習った英語表現を使って学校や日本のことを紹介することもできます。

(2)　WebやCDの利用

小学校の先生方にとって、英語の発音は自信のないところの１つだと思います。そんなときには、英語の発音が簡単に聞けるCDやインターネットのデータを使うのはとても有効です。以下に書いてあるのはその使用可能なURLです。参考までにどうぞ

○学研デジタルキッズ英会話

http://kids.gakken.co.jp/campus/kids/english/english_index.html

11の表現について絵本をクリックしたり、ゲームをすることができます。

○GenkiEnglish.com

http://www.genkienglish.net/gamemenu.htm

英語活動で使えるゲームの仕方の説明とか、手軽に使えるゲームがおいてあります。

○エイゴリアンホームページ

http://www.nhk.or.jp/eigorian/teacher/back.html

ここには過去に使われたパソコンで使えるゲームがいっぱいおいてあります。

３．インターネットの高速化への期待

金沢市は２学期から学校間が10Mで結ばれるようになります。また、校内LANの整備と共に各学級にパソコンが１台配備されます。整備には３年かかりますが、学校間交流や校内掲示板などを利用した新しい実践がどんどんされると思います。

これからは、小回りのきくホームページを生かしてタイムリーな話題をどんどん提供していきたいと思います。

新しい研究部会発足

松任市立東明小学校　中條敏江

1．研究経過

2001年3月末に第1回研究部会がスタートしました。小中高障と校種が違い、河北から山中までいろいろな地域を代表される方が参加されました。自由度の高い研究部ですが、戸惑いの中で、村井先生の支援を受けながら、研究部としての基本方針を話し合い、企画の原案をたてました。それについては5月末の総会で承認され、金沢大学の加藤先生がアドバイザーになって下さることも決まりました。その後は、メーリングリスト上で各企画の担当リーダーが提案し、他の方々で意見を出し合いました。6月には第2回研究部が開かれ、企画も煮詰められ、現在企画5つが決定され担当者の方々で具体的な進行をしているところです。

2．研究の基本

・研究部員が研究を深められる企画
・会員や周りの人に呼びかけられ、情報教育の裾野を広げられるよな企画
・地域や校種を超えられるような企画

3．各企画

(1)　校種を超えた授業実践研究

小中高共通の題材で情報倫理の授業を行い、評価の視点に沿って、各発達段階・経験値を元に分析研究する。

(2)　地域を超えた授業実践研究

各地域の実践を紹介し合うと共に、教員のプレゼンテーション能力を高める。

(3)　交流プロデュース

①　テーマプロジェクト交流支援

潟をテーマとしたプロジェクトを機器環境と学習内容の両面から支援する。

②　ＴＶ会議支援

交流を志すＴＶ会議の経験の少ない先生へ機器の貸し出しシナリオ等の支援を行う。

(4)　研究補助

地域で情報教育の拡大に努めている各支部に研究補助を行う。

(5)　情報教育学習会

講師を招き、会員自身が学習できる場を企画する。

どうぞ会員の皆様方のご協力ご指導をよろしくお願いいたします。

新研究部に期待する

金沢大学教育学部附属教育実践総合センター　加藤隆弘

1．はじめに

ついに動き出した……と書くまでもなく、すでに大きな一歩をこの研究部は踏み出している。

今回、それぞれに魅力のある方々の集まる研究部に加えていただけることになった。6月12日、東明小学校での第二回研究部会参加にあたり、正直なところある種のプレッシャーを感じていた。が、会が始まってそれぞれの部門の研究計画が提示され、議論の元でさらに具体化して行く様子を目の当たりにしたところで、このプレッシャーは心地よい緊張感と、それを上回る「これは面白いことになりそうだぞ」という期待感に置き換わった。会が一段落ついてからも続いた実践アイディアの交換、その後のメーリングリスト上での活発な議論から、私も様々な示唆とエネルギーのおこぼれに預かっている。「研究アドバイザー」という立場は頂いたが、むしろ皆さんの研究実践の場に立ち会わせていただく中で、「具体化の力」を学び取っていきたいと考えている。

2．新たな「つながり」を力に

今回、研究部では「地域・校種を越えるとりくみ」を研究の柱の一つに据え、諸企画を立ち上げている。この中に「あなたもプレゼンやってみませんか？」と、夏の実践発表交流会が設定されている。ここではそれぞれの学校での取り組みを紹介しあう中で、その工夫や課題を共有することはもちろん、一件あたり5分程度という制限時間を設けることで、伝えたい内容を最適化し表現する力をなによりまず教師自身が身につけていくをねらっている。

また、共同・交流学習のすそ野を広め、実のある学習へと育てていくことをねらって、機器の貸し出しや設定運用支援、交流相手のコーディネート等を行う「交流支援プロジェクト」も立ち上がっている。こちらはすでに活動を開始し数校で作業をおこなった、とのことだ。

メンバーの得手を活かして立案された各企画はそれぞれ十分に練られたもので、なれていない教師にも「あ、これなら参加してみたいな」と思わせるような魅力と具体的支援を備えている。せっかくのこの機会、活かしてより多くの学校・教師に参加を求め、力を合わせて様々な「智恵」を明らかにしていきたい所だ。検討しあう中で新たな刺激からアイディアを見いだし、熟練した技術を分け合う……はじめの思い切りさえつけば、「つながり」が互いを一歩も二歩も進めてくれることになるだろう。その魅力をぜひこれから取り組む方々に伝えていただきたい。

3．着実に根付かせていくために

これらの取り組みを根付かせ、より多くの地域・学校において着実に教師・学習者双方が力を得ていくことができる状態を作っていくためには、それぞれの実践や考え方、支援の体制等について具体的にわかりやすくまとめ、提示していく必要があるだろう。本年度の全国大会（富山）で行う予定の実践報告とそこで得られる知見をさらにたたき台として、研究体制・実践支援体制の手直しを行い、次年度以降に繋いで行くことが出来れば理想的だ。

長期的視野で眺め、課題を一つずつ明らかにしながら構築していくことができれば幸いである。

全教員がコンピュータ操作支援にあたれる体制作り

金沢大学教育学部附属中学校　端 崎 圭 一

1．本校の総合的な学習の概要

本校では、1997年４月より「柏樹タイム」と名付けた総合的な学習に取り組み始め、2001年４月で５年目を迎えた。この４年間に多くの試行錯誤を繰り返したが、「柏樹タイム」のねらいと学年毎の活動基本方針・内容は、以下の様に定着した。（ただし、１・２年生の活動内容は生徒の実態に応じて選ばれ、全てを１年間で実施したのではない。）

(1)　ねらい

「自己決定力」と「情報活用の実践力」の育成をめざす。

(2)　活動基本方針・内容

１年生…クラス単位による学習。支援者は、クラス担任と学年の中でコンピュータ操作に堪能な教員。

- クイズ編集ソフト「ごたくどす」を使用してのクイズ作りと評価
- 文化祭で行ったシルエット劇を素材にしての電子絵本作りと評価
- 学校紹介のホームページ作り
- 養護学校との交流会

２年生…グループによる課題追求学習。支援者は、学年の教員全員。

- 金沢に関するテーマを持つ複数の講座から自分の興味や関心に応じた講座を選択し、その講座で示される課題をフィールドワーク（＝FW）や文献、およびネット検索による調査を通して追求。コンピュータなどを用いてまとめや発表をする。
- 自分の興味や関心に応じて、金沢と修学旅行先の京都に共通するテーマを設定し、両都市のFWや文献、およびネット検索によるによる調査を通して課題を解決。コンピュータなどを用いてまとめや発表をする。

３年生…個人による課題追求学習。支援者は、学年の教員全員。

- 自分の興味や関心に応じて金沢に関するテーマを設定し、FWによる調査や文献およびネット検索調査を通して課題を解決。コンピュータなどを用いてまとめや発表をする。

2．コンピュータ使用の問題点

活動内容に記してあるように、本校の「柏樹タイム」に不可欠になっているのが道具としてのコンピュータである。本校では、生徒がワープロ用及びプレゼンテーション用機器として使用でき、かつ、インターネットへの接続が可能な端末は80台を超える。また、各端末からファイルサーバーにアクセスし、文書ファイルや画像・音声ファイルの保存が容易に行える環境にある。

そうした環境の中で、まず、問題になったのは、ソフトウェア操作の指導やサーバーへのアクセス方法の指導、端末やネットワークに関するトラブルに対処できる教員の数が少ないことであった。1997年から1999年の３年間は、各学年２～３名の教員だけで、これら全ての指導やトラブルの対処にあたった。他の４～５名の教員は、指導に関わりたくてもソフトウェアに関する知識が不足していたり、個人的に端末操作はできても実際の指導となると不安があったりして、なかなか生徒の支援にあたれないのが実情であった。２～３名の教員での指導や支援では正規の授業内で処理しきれないことが多く、昼休みや放課後に生徒を集めて活動をさせたこともしばしばあった。

また、コンピュータを用いての作業に一旦入ると、本来指導に当たるべき担任や担当教員と生徒間のコミュニケーションよりも、コンピュー

タ操作を支援する教員とのコミュニケーションの方が自然に増えてくる。生徒・担任（または、担当教員）・コンピュータ操作支援教員の三角関係の中で、意思の疎通がうまく行かないで戸惑う場面がしばしばあった。

「柏樹タイム」の活動方針や内容に関してはほぼ定着したものの、上記のような問題が継続すれば、一部の教員への負担が過剰になるだけでなく、そうした教員の多くが異動した場合、コンピュータを用いた活動そのものができなくなってしまう可能性を本校の誰しもが感じていた。

3．問題解決の糸口

そうした中、本校では、段階的に三つの方法を採ることで、問題を少しでも解決する方向を目指している。

(1) 非常勤講師の招聘

1999年4月から、金沢大学大学院からコンピュータおよびネットワークを専門に研究している大学院生を非常勤講師として招き、1年生の活動だけではあるが、週4時間、担任と同学年の教員1人と計3人でT・Tの授業形態で生徒を支援してもらっている。

生徒を支援してもらうばかりでなく、本校の教員も学ぶことが多く、より効率のよい端末の操作方法を知ることができ大いに助かっている。

(2) 全教員への端末配付

2000年3月に、全教員へ端末が配付された。これら全ての端末は、生徒用端末同様、インターネットやファイルサーバーにアクセス可能であり、また、生徒が使用している端末とほぼ同様のソフトウェアが入っている。

このような環境が整うと、ほとんどの書類がそれらの端末で作成され始め、ファイルサーバーでファイルの共有化がどんどん行われるようになってきた。すると、今までコンピュータを敬遠しがちだった教員が、ファイルを見るために必然的に操作をしなければならない状況が生まれ、一旦、コンピュータの便利さや有用性を知ってしまうと、最初あった抵抗感はすぐに消失したようである。今では、必要とあれば、デジタルカメラやデジタルビデオから静止画や動画を取り込む作業を支援できる教員は過半数を超えるまでになってきている。

(3) マニュアル作りと事前研修

1年生の「柏樹タイム」に限って言えば、2000年4月からクラス担任がイニシアティブをとって授業を進めていくことを申し合わせた。前述したように、1年生ではクイズ編集ソフト「ごたくどす」を使用してのクイズ作りと学校紹介のホームページ作りに取り組んだが、担任全員が最初から「ごたくどす」とホームページ作成ソフト「FrontPage Express」の操作・説明ができたわけではない。担任にソフトの操作をできるだけ容易に理解してもらうために、まず、操作に関するマニュアル作りを行った。具体例を挙げながらクリックの一つひとつまで詳細に述べたものを作成した。さらに、授業の展開に戸惑わないように指導案も作成した。これらのマニュアルと指導案は、前もって担任に渡しておき、放課後などの時間を利用して個々に事前研修をしておいてもらった。

作成したマニュアルや指導案は多少の改訂をした上で、今年度2001年4月からの「柏樹タイム」にも使用している。さらに、事前研修について言えば、連続して1年生を担当しノウハウを身に付けた教員が、授業前日、学年の教員にコンピュータ教室に集まってもらい、綿密な打ち合わせをしながらの研修に発展させている。

4．今後の課題

本校のように教員自身がコンピュータを道具として日常的に使用する環境が整ってしまうと、コンピュータ操作に関して生徒を支援できる教員の数は意外に早く増やせるのではないかと思われる。ただ、ある程度の教員数が確保できたならば、次に求められるのは、学校の教育活動の実際に応じたより良いマニュアル作りや指導案作りであり、そのための教員間コミュニケーションであるように思われる。本校では、その点に留意して今後の支援体制を作っていきたい。

【参考文献】

金沢大学教育学部附属中学校　研究紀要41号
金沢大学教育学部附属中学校　研究紀要42号
金沢大学教育学部附属中学校　研究紀要43号

高校新教科「情報」について

石川県立翠星高等学校　守田健雄

1．第2回免許講習会の概要

平成15年度からの高等学校学習指導要領の改訂による教科「情報」の新設に伴い、第1回の免許講習会が平成12年度に実施された。石川県では約40人の免許取得者が誕生した。

本年（平成13年）度も、同様な講習会が文部省主催、県教委共催の形で、県教育センター（加賀・金沢地区）、七尾商業高校（能登地区）を会場にして行われる予定で、参加者はそれぞれ40人程度が予定されているようである。実施月日は、平成13年8月8日～8月31日（加賀・金沢地区）、平成13年7月23日～8月10日（能登地区）、それぞれ合計15日間である。

講習会の内容は、昨年度とほぼ同じであるが、修了試験が最終日に予定されている。また、演習において、普通教科「情報」と専門教科「情報」とが分けられているのも昨年同様である。

内容的には、1コマ90分で講義33コマと演習（実習）27コマからなっているのも昨年度と同様である。講義の際は、衛星通信を利用した講義も何回か予定されている。

最終的には、平成15年度までに県内に200人の「情報」免許保持者が揃う予定の中での講習会であり、本年度も意欲的な取り組みが期待される。

2．昨年度との比較

昨年度の受講生の中で、改善を望む声が多く上がったのは、講習会の日程であった。合計で15日間と長い上、年末・年始をはさんだ形の講習日程の中で、レポートや指導計画等の提出課題の時間が別途必要であったことから、正月返上で提出課題に取り組んだ人も多かった。

その点、今年度は夏季休業中に完全におさまっているため、昨年度よりはるかに受講しやすいと思われる。一方で、連続した日程なので、事前の十分な予習も要請されるようである。

3．昨年度受講生は今

昨年の免許講習会の場でも、情報の世界は進歩の早い世界であるから、フォローアップ研修が不可欠であるという声があがっていた。本年度は、この点に関してまだ具体的な動きは降りてきていないが、平成14年度に「情報」免許取得者対象の研修も予定されているとのことである。また、受講者間で情報を共有し連絡を密にして、平成15年度に向けて十分な準備をしていきたいという要望も強かったが、これも今後の具体的な動きが期待されるところである。

一方、気になるのは、各学校の動きである。各校とも平成15年度の教育課程の具体的検討は今年の9月ごろを目途に動き出すようである。その際、普通科・総合学科においては、教科「情報」の科目・時間数がどうなるか。また、専門高校においては、新設の専門教科「情報」に対して工業・商業・農業等の専門教科の「情報処理」関係科目による代替が可能であるということから、新教科「情報」の導入が進まないのではないかという見方もあり、従来の専門教科における「情報処理」関係の科目との整合性をいかにとっていくのかが注目される。

昨年度の受講生も免許は取ったものの、平成13・14年度は、従来どおりそれぞれの教科を担当しながら、校務分掌等をこなしているわけであり、新教科「情報」を成功させるためにも、授業内容を検討・吟味し、試行していく時間の確保の必要性を各自感じているのが現状であろう。

石川県教育工学研究会会則

第１条　本会は石川県教育工学研究会と称する。

第２条　本会の事務局は金沢大学教育学部附属教育実践総合センターにおく。

〔目　的〕

第３条　本会は石川県の教育の振興をはかるために、新しい時代に即応した教育方法・技術の研究開発ならびに情報の交換を行ことを目的とする。

〔事　業〕

第４条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1)　教育工学研究大会等の開催
(2)　研究会・講習会・講演会等の開催
(3)　教育メディアの開発・利用に関する研究
(4)　教育システムに関する開発および研究
(5)　授業改善に関する研究および教材開発
(6)　教育工学に関する共同研究の助成
(7)　国内並びに外国との教育工学に関する情報交換
(8)　研究紀要・機関誌・図書等の発刊
(9)　その他、本会の目的達成に必要な事業

第５条　本会の目的および事業に賛同し、協力するものをもって会員とし、次のように区別する。

(1)　一般会員　　(2)　賛助会員

第６条　本会に顧問および指導委員をおくことができる。

〔支　部〕

第７条　本会の事業を円滑にするため支部をおくことができる。

〔役　員〕

第８条　本会に次の役員をおく。

(1) 会　長	１名	(7) 事務局次長	３名
(2) 副会長	若干名	(8) 研究部長	４名
(3) 代表理事	若干名	(9) 研究員	若干名
(4) 常任理事	若干名	(10) 運営委員	若干名
(5) 理　事	若干名	(11) 会　計	３名
(6) 事務局長	１名	(12) 会計監査	２名

〔役員の選出〕

第９条　役員の選出は次のようにする。

(1)　会長は総会において選出する
(2)　副会長・代表理事・常任理事・理事・会計は、会長が委嘱する。
(3)　事務局長および事務局次長、研究部長、研究員、運営委員は、理事会において推薦し、会長が委嘱する。
(4)　会計監査は、会長が委嘱する。

〔役員の任務〕

第10条　役員の任務は次のように定める。

(1)　会長は本会を代表し、会務を統括する。
(2)　副会長は会長を補佐する。
(3)　事務局長は本会の事務を統括する。
(4)　事務局次長は事務局長を補佐し、本会の運営に関する企画・立案にあたる。
(5)　代表理事・常任理事・理事は、本会の運営についての重要事項を審議する。
(6)　研究部長・研究員は、運営委員の協力を得て、本会の事業を推進する。
(7)　会計は本会の会計の処理にあたる。
(8)　会計監査は本会の会計経理の監査にあたる。

〔役員の任期〕

第11条　役員の任期は1年とする。ただし再任をさまたげない。

〔理事会〕

第12条　理事会は必要に応じて会長が召集する。

〔事務局〕

第13条　事務局は、事務局長、事務局次長、研究部長、研究員をもって構成し、必要に応じて事務局会をもつ。

〔総　会〕

第14条　総会は年に1回開催し、会長がこれを召集し、次の事項を審議、承認する。

(1)　会長の選出
(2)　予算・決算に関する事項
(3)　事業計画ならびに報告
(4)　会則の改正
(5)　その他必要事項

〔会　計〕

第15条　本会の会計は会費、賛助会費、補助金、寄付金その他をもってあてる。

〔監　査〕

第16条　本会の会計経理は会計監査による監査を受けなければならない。

〔会計年度〕

第17条　本会の会計年度は毎年４月１日から翌年３月31日までとする。

〔細　則〕

第18条　本会則の実施に必要な細則は理事会において定める。

〔付　則〕

昭和45年６月21日会則施行
昭和56年５月24日改訂
昭和59年５月20日改訂
平成12年５月28日改訂

【教育討論会】

「総合的学習における英語活動」 司会　県教育センター　村井万寿夫

コーディネーター	金沢大学教育学部附属教育実践総合センター　講師			加藤　隆博
報　告　者	金沢市立南小立野小学校	今井　　京	金沢市立扇台小学校	清水　和久
コメンテーター	金沢市立大徳小学校	松永　法子	ＥＡＡ	宮鍋　佳子

今井先生の報告

南小立野は現在文部科学省の委託を受けて教科としての英語の研究をしている開発校である。

○文字指導の研究

南小立野では文字指導は４年生から行っているが、これは英語にふれはじめて３～４年あたりが文字指導の時期として最適であると言う意味で、４年生が最適という意味ではない。３年生ぐらいまでは文字があるんだよといってもあまり反応がないが、４年生の後期になると「英語って文字ある？」のと聞いてきたり、６年生になると文字を書いてみたい、読んでみたいという欲求が出てくる。

○評価にビデオの活用

評価の観点は自己評価と客観評価の相互評価を織り交ぜながらやっている。具体的には活動をビデオでとりそれを自分たちで見る。自分の姿を客観的に評価するので英語の力だけでなく、身振り手振りのコミニケーションの力がわかる。「いっしょに遊ぼうと言っているのに楽しくない顔をしているぞ」ということも評価の対象となるのである。また、自分の英語をどれくらい言えるようになったか、カセットテープに英語を吹き込んでみてＡＬＴに聞いてもらうこともしている。

○英語教育の２つの考え方

① コミュニケーション能力の基礎　基本語句をある程度身に付けさせる。

② 地球人としての基礎　国際理解、文化理解を中心に行う。

②を中心とすると理念あって学びなしになる可能性がある。しかし、①を中心とするとゲーム主体でやっていくので活動あって学びなしになる可能性もある。一長一短であるが、だれでもできることを考えると①を中心とする方がこれからはやっていきやすいのではないか？

○おすすめの実践例

習った英語を使ってコミュニケーションを実際にＴＶ会議で行った。内容は e-mail 交換、ボランティア活動の紹介、方言等の交換などであるが Japanese sweet（和菓子）を大阪に紹介するために自分たちで調べはじめ、やがて興味が日本の伝統文化に広がっていった。このように英語を核として活動を広げていくことができれば総合としての価値があると思う。

松永先生のコメント

児童に英語活動の見通しをもっと持たせてもいいのではないか、そのためには生活科に近いようなテキストが必要である。文字指導に関してはカードを作る時にキーボードから入力させるなど、児童の関心が出てきたところで使っていけばよい。ＴＶ会議では方言などを知ることによってこどもたちの学びたい思いをどんどん広げていけたらいいと考えている。

宮鍋佳子ＥＡＡのコメント

英語で重要なのは楽しいから続けるという点で、書くことを中心にすると興味が半減してしまう。小学校時代はいろんな世界があることを認識させる時期で英語を通して文化の違いや、金沢の伝統文化などを紹介していくと良い。

加藤先生のコーディネート

評価の項目は、内容面ではなく積極的に関わる態度などの面での評価が必要。英語活動を一般化するにはぜひともテキストが必要である。

清水先生の実践報告

総合（英語）のＴＴとして英語活動を担当。

○パソコンの利用

英語の発音の苦手な先生にも英語活動ができるように発音の部分はパソコンを利用している。例えば授業の最初に、パソコンを使って今日の表現のプレゼンをし、説明は日本語ではせずに、

何度も英語で表現するうちに、その内容を児童につかませたいと思っている。また、ＮＨＫの英語番組「えいごリアン」の利用や、そのホームページにあるゲームも利用している。２人で１台のコンピュータを使っているので、うるさくならないようにヘッドホーンをつけているが、児童はかなり集中して聞いている。ただパソコンに頼るとリスニングはうまくなるが、自分からしゃべる点が少しおろそかになる可能はあるかもしれない。

○英語は地球語

現在外国の人とコミュニケーションをとろうとすれば英語は不可欠である。英語を学べば世界の人口の１/３の人と話せることになる。特にアジアの国々では、どこも英語の早期教育に熱心である。交流のある台湾の児童が英語でしゃべっている映像を使い、その内容の聞き取りも授業で取り入れている。これらの映像を見ることによって、なまりのある英語でも、自信を持って話すことが大事であり、その内容が大事であるということを理解させたい。

宮鍋ＥＡＡのコメント

日本人なまりの英語を話すことは恥ずかしいことではない。教師のなまりのある英語で話した方が子ども達はよく覚える。

松永先生のコメント

担任が生の声で話そうとすることに意義がある。担任がしゃべった英語が少し変でも、児童は自分で選択して聞くことができる。人と関わっていくことを大事にした英語学習を大切にする必要がある。

加藤先生のコーディネート

先生は外国語をつかってしゃべる度胸が必要である。英語は度胸をつける教科でもあるかもしれない。

会場との討論

○「小学生でつけた力がうまく中学につながらないのはなぜか？」

松永：中学では英語の新鮮味がなくなっている。態度面としては英語活動をしてきた小学生がものおじしなくなったように思う。

宮崎：子どもは、中学ではＡＢＣから始まるので退屈を感じる。小学校でやったゲームと同じ物をしている場合もある。

松永：中学校になると勉強をしたいという意欲が強くなる。優しい英語でいいからいっぱい話してくれた方が子どもにとっては良いと思う。

○「小学校から英語をやってきた生徒とそうでない生徒との違いはあるか？」

今井：小学校から英語を習ってきた生徒は外国人が話しても楽に構えていて、わかるところだけ聞こうとしている。でも２，３年になるともう違いはわからない。

○「英語のカリキュラムは小中一環でプランニングしているのか？」

松永：ワーキンググループをつくって作成したものを今年実践をしている。中３のゴールは「相手の気持ちを考えて交流する。」をめざしてやってほしい。

○「英語活動は文化理解も含めておこなう？」

今井：英語を軸としたカリキュラムをつくって題材は文化理解、国際理解を取り込む方向で考えていきたい。表現形式に終始しているだけの英語はだめ。自分ことを伝えたり、相手の意見を取り込めるようにさせたい。

鍋島：英語活動で動物の紹介や食べ物の紹介をするときにバングラディッシュの風景とともに動物や果物を紹介することによってバングラディッシュの文化も紹介できる。それにより英語以外のことも興味を持てた。

○「小の英語活動ではどこまでねらうのか？」

清水：１年間に習った言葉の中で自分の思いを伝えられたらよいと思っている。

今井：言えなくてもいいが５ｗ１ｈで聞かれたことがわかるようにさせたい。

宮鍋：言われたことがわかればよい。発し方は英語以外にもある

松永：言いたいことの思いがふくらむのが小学校。英語の表現はあとで付いてくる。

加藤：自分の思いを出したいという願いをいかに育てていくか、そのきっかけが英語活動になってほしい。

村井（司会）：子どもにとって英語活動はどうなのか？英語活動も情報教育と並び教育方法の１つの範疇にはいるのでこれからもみなさんと考えていきたい。

（文責　清水）

平成13年度 石川県教育工学研究会役員名簿

（順不同　敬称略）

【会　　長】　吉田　貞介（金沢学院大）

【副 会 長】　鹿野　宏志（県教育セ）　高木　邦雄（野々市明倫高）　押野　市男（西小）
黒上　晴夫（金沢大）　中川　一史（金沢大）　岡部　昌樹（金沢経済大）

【代表理事】　前田　　俊　岡野　重和　野村　祐治
米田昭二郎　西出　　隆　一家　　勉
中村　孝雄　橋本正尊

【理　　事】　◎は常任理事

（加賀江沼）　◎畑　　忠（加賀・山代小）　竹本　利夫（加賀・三谷小）

（小松能美）　◎春木　俊一（小松・串小）　◎竹下　一郎（小松・安宅小）　寺西　九重（小松・荒屋小）
吉田　　博（小松・中海中）　荒谷　　実（小松地方教育事務所）　清丸　亮一（小松工）

（石川松任）　西田　政人（野々市小）

（金　　沢）　◎谷内　敏夫（野田中）　◎藤井　昭久（諸江町小）　◎北本　正明（医王山小・中）
南　　千之（泉中）　内田　正明（不動寺小）　宗末　勝信（県教委）
堀内　克之（西南部小）　尾小山輝子（盲学校）　明星　哲久（米泉小）
三田村英明（金大附属小）　宇都宮　博（県教委）　池廣　厳応（中村町小）
加藤　隆弘（金沢大）

（河北羽咋）　坂井　善久（羽咋・余喜小）

（七尾鹿島）　◎山本　昌猷（鹿島・鳥屋小）　笹田　光春（鹿島・越路小）　大森　俊彦（七尾・和倉小）

（鳳至輪島珠洲）　◎今寺　研治（輪島・町野中）　榎木　孝則（輪島・鵠巣小）

【運営委員】　○は研究員

（加賀江沼）　下出　　貴（加賀・勅使小）　桜木　成二（加賀・三谷小）　和田　良昭（加賀・橋立中）

（小松能美）　石黒　和彦（小松・第一小）　○向出　　章（小松・矢田野小）　○池田　利昭（小松養護）

（石川松任）　畠　　一馬（泉丘高）　○中條　敏江（松任・東明小）　○正來　　洋（野々市小）

（金　　沢）　上出　　雅（木曳野小）　升田　敦士（鳴和中）　坂井　直澄（高岡中）
山崎　　治（西南部小）　小川　　宏（伏見台小）　菖蒲田英夫（金大附属小）
○大桑　晴雄（高岡中）　○奥野　豊夫（明成小）　宮中　和久（二水高）
○樫田　豪利（金大附属高）　○坂上　則子（押野小）　中島　満子（小立野小）
吉本　雅之（木曳野小）　羽場　政彦（清泉中）　山本　英喜（県教育セ）
山本　秀紀（港中）　三井　正一（二水高）　米田　　茂（内川中）
○端崎　圭一（金大附属中）　○島崎　　徹（二水高）　○守田　健雄（翠星高）

（河北羽咋）　山崎　　副（河北・西荒屋小）　青江　弘義（河北・清湖小）　中西　英一（羽咋・邑知小）
○飯田　淳一（津幡・条南小）　○山下　雅美（内灘・大根布小）　細川都司恵（河北・清湖小）
小川　　昇（河北・七塚小）

（七尾鹿島）　笹川　修栄（鹿島・鳥屋小）　○前　　正人（鹿島・鹿島中）

（鳳至輪島珠洲）　山下　至高（輪島市教委）　杉森　　学（鳳至・穴水中）　川端　孝尚（珠洲・松波小）
長井　　裕（輪島実高）　徳力　　豊（県教委）

【事務局長】　村井万寿夫（県教育セ）

【事務局次長】　嶋　　耕二（西南部中・組織担当）　畠山　久雄（小松養護・企画担当）
浜坂　昌明（小将町中・会報担当）　清水　和久（扇台小・Web 担当）

【研究部長】　中條　敏江

【研究副部長】　向出　　章　　飯田　淳一

【会　　計】　事務局次長兼務　〔補〕村井美智子（金沢大）

【会計監査】　紙谷　　威（東浅川小）　金崎　誠一（小将町中）

【日本教育工学協会役員】

（理　　事）　吉田　貞介　　黒上　晴夫

（理　　事）　岡部　昌樹

【顧　　問】　伊東　平俊　　柳田　　勇　　山崎　　豊

【指導委員】　太田　雅夫　　小笠原喜康　　金子　劭榮　　黒田　　卓　　坂元　　昂　　西之園晴夫
堀田　龍也　　松原　道男　　水越　敏行　　山西　潤一　　山極　　隆　　吉崎　静夫
赤堀　侃司　　鈴木　克明　　清水　康敬　　堀口　秀嗣

石川県教育工学研究会　会 計 報 告

平成12年度決算

収　入

科　　目	予　　算	決　　算	備　　考
会員負担金	450,000	472,000	3,000×153名、1,000(1日会員)×13名
県補助金	420,000	420,000	
賛助会費	300,000	300,000	30,000×8社、60,000×1社
雑収入	1,000	347	銀行利息
合　　計	1,171,000	1,192,347	

支　出

科　　目	予　　算	決　　算	備　　考
賃金	75,000	75,000	テープ起こし等
謝金	60,000	60,000	総会講演、セミナー講演、座長
旅費	160,000	150,000	全国大会派遣旅費
消耗品費	49,000	54,550	上質紙、フィルム、タックシール、ケント紙、写真、フィルム、ビデオテープ
印刷費	470,000	427,510	会報（No.59、No.60）、会員名簿、研究紀要、封筒印刷
図書費	150,000	146,620	教育工学協会負担金、支部活動費等
食料費	7,000	39,957	諸会合食料費
通信運搬費	160,000	188,710	切手、ハガキ、発送費
借上費	40,000	50,000	会場借上、液晶プロジェクター・ノートパソコン等借上
合　　計	1,171,000	1,192,347	

平成13年度予算

収　入

科　　目	予　　算	備　　考
会員負担金	450,000	3,000×150名
県補助金	420,000	
賛助会費	300,000	60,000×1社、30,000×8社
雑収入	1,000	銀行利息
合　　計	1,171,000	

支　出

科　　目	予　　算	備　　考
賃金	75,000	テープ起こし等
謝金	120,000	総会講演、セミナー講演、課題研究、座長
旅費	210,000	総会・全国大会派遣旅費、北陸三県派遣旅費、県外視察費
消耗品費	59,000	上質紙、フィルム、タックシール、フロッピー、ケント紙、写真フィルム等
印刷費	410,000	会報（No.61、No.62）、会員名簿、研究紀要、封筒印刷
図書費	150,000	教育工学協会負担金、支部活動費等
事務連絡費	7,000	諸会合食料費
通信運搬費	100,000	切手、ハガキ、発送費
借上費	40,000	液晶プロジェクター借上
合　　計	1,171,000	

平成13年度　石川県教育工学研究会事業計画

事　　業	期　　日	概　　要
1　総　　会	5月27日	平成13年度総会（文教会館）27日
理 事 会	3月3日	平成13年度理事会（於：金沢大学）
2　研究事業	5月27日	教育討論「総合的学習における英語活動」
	7月8日	情報教育セミナーin金沢（金沢学院大学）〔共催〕
	8月4日	夏季セミナーⅠ「教育用コンピュータソフト体験」
	8月25日	夏季セミナーⅡ「授業でのパソコン活用研修」
	10月13～14日	総合的学習セミナーin金沢
	10月26～27日	第27回全日本教育工学研究協議会 第15回コンピュータ教育研究協議会 第6回全日本情報教育研究協議会全国大会富山大会への参加
	12月8日	冬季ｾﾐﾅｰ「親子インターネット教室」
	3月3日	平成13年度石川県教育工学研究大会（於：金沢大学）
3　刊行事業	5月、7月、9月、11月、2月	研究会ニュース（A4版、2～4頁、300部）
	7月	会員名簿（300部）
	7月、3月	会報（61号、62号、B5版、24頁、350部）
	3月	第27号研究紀要（B5版、40頁、350部）

編集後記

ようやく会報第61号が完成しました。新事務局体制でのはじめての会報、執筆者の原稿をそのまま写真製版でつくった会報など今回ははじめてのことが多い会報である。

急に原稿を依頼したにもかかわらず、快くお引受けくださいました会員の皆様、どうもありがとうございました。　【会報担当】

平成13年7月10日発行

発行者　石川県教育工学研究会
代表者　吉田貞介
事務局　〒920-1192　金沢市角間町
　金沢大学教育学部附属
　教育実践総合センター内
　TEL 264-5588　FAX 264-5589
印刷所　㈱小林太一印刷所
　TEL 238-5454　FAX 238-5453